

人文主義を維持し左翼を占めること

神山 伸弘

人文学の根本問題

人文学のよって立つ人文主義 (Humanism) を問題とするとき、その死命を制するのは、人間研究と文献主義である。

もちろん、「人間」の研究は、自然科学も取り扱うのだから、人文主義の独占物ではない。しかし、自然科学が「もの」として「人間」を切り裁き組み立てるのだとすれば、人文学は「こころ」としてそれを観る。すなわち、人文学は、「人間の精神」を研究する。もっとも、「人間の精神」とはいつでも、これとて、自然科学の研究対象でもある。しかし、その研究方法は、やはり「人間の精神」を「もの」として扱う以外にない。だから、神経の仕組みと働きを調べ、それが集積した脳のそれらを調べる。

人文学は、「人間の精神」に、それが表現された行為から迫る。

その表現には多彩なものがあるが、学問としては、どうしても文献にならざるをえない。今日、パフォーマンスをそのまま録音・録画する技術もあるから、文献とはかならずしも呼べないものも、表現を保存する貴重なメディアであることはいまでもない。だが、やはり、学問であるかぎりには、こうしたメディアをそのままのかたちで放置するわけにはいかないだろう。最低限、文献によつて整理して見せなければなるまい。

ヘーゲルは、「話し (Sprache) は精神の現存在 (Daseyn 生存) である」という言葉を残した (『精神の現象学』第六章C節c「良識」第六六段落)。「精神」がそのままの直接の姿を生きたかたちで現すのは、「話し」においてほかにない。そして、その「話し」は聴き取られてこそ意味をなす。

人文主義は、こうした「人間の精神」による「話し」を聴き取る営みである。それは、神経線維に耳を傾けても聴こえてくるは

ずがない。^①とはいえ、その「話し」も、たんなる意味のない音として流れるだけなら、あるいは文字として埋没するだけなら、けっして「こころ」に響くことはないだろう。だとすれば、そこに意味を見出す力と、また文字を発掘する探求心とが、聴く側にも具わっていないならばならないはずである。

「話し」が感性的な「音」以上の意味であるにとらえるのは、人間の理性 (Vernunft) である。ヘーゲルは、「聴く」ということが「理性」であることを強調した哲学者だった。「理性は、神の仕事聴き取ることである」(『歴史哲学』「世界史における神の規定」^②)。このさい、「神の仕事」とは、「真実の善」のことである。というのも、ヘーゲルによれば、「真実の善」を表象で語れば、「神」だからである(同前)。

この筋で考えれば、「話し」に見出すとは、「話し」に潜む「真実の善」を聴き取ることであろう。当然ながら、ここには、「偽りの善」とそれとを聴き分けることも含まれる。「地獄への道は善意で敷き詰められている」という格言もある。^③さらに、悪意で「善」を偽る者もかなり多くいる。だから、文献主義は、文献批判にまで進まざるをえない。この「批判」は、「理性」によるものだから、好き嫌いといった感性的なものを通り越した水準で遂行されることになる。

おそらく、ここには論争が生じざるをえないだろう。しかも、批判すべきものが権力や権威のよつて立つところに触れるならば、その批判は、政治的な性質まで帯びることになる。人文主義は、この極北に至ったとき、みずからの名を損なわずにいられるのか。このへんの自覚のいかんが今日鋭く問われているのかもしれない。

学問の上下・虚実なるもの

カントは、上級学部(神学部・法学部・医学部)と下級学部(哲学部)という当時の命名慣習について、政府の関心の程度として理解した。すなわち、神学部・法学部・医学部は、「教説がどのような性質のものであるべきか、あるいは公に講述されるべきか」が「政府自身の関心を引く」から「上級」だとされ、哲学部は、「学問の利害関心にだけ配慮すればよい」から「下級」だとされるのだ、^④という。

このさい、カントによると、政府が関心を寄せるのは、上級学部には「最も強力で最も持続的な影響力を国民に及ぼす手段」があるからである。それはなにか? 神学部は「各人の永遠の幸せ(Wohl)」、法学部は「市民的な幸せ」、医学部は「身体的な幸せ」に関わるからである。^⑤そして、それぞれの教説は、神学者の場合

「理性からではなく聖書から」、法学者の場合「自然法からではなく国法から」、医学者の場合「自然学ではなくて医療法規 (Medicinalordnung) から」汲み取ってくる。⁶⁾ こうした教説は、いずれも、聖職者や司法官、医者といった実務家にとって強制的な性格を帯びるのである。⁷⁾

上級学部の学問は、まさに人びとの「幸せ」に役立つ教説を生み出す点で、また、その教説を用いる実務家を養成する点で、「実学」と呼ぶにふさわしいであろう。そして、こうした「実学」は、権力によって支えられ、権威主義をみずからの学知の本性とせざるをえない点にも注意が必要である。「実学」の「役立つ」面の裏では、権力主義・権威主義が蠢いている。「幸せ」なるものを、政府の権力と学問の権威とを用いて引き出すのが、「実学」の本領というべきものである。

これに対し、下級学部の哲学部は、「学問の利害関心にだけ配慮すればよい」とされるので、人々の「幸せ」に直結するものからならずしも即物的に示すことができる。哲学部は、「理性から借りてきた諸指令を通じて」そうした「幸せ」に関わるので、「誠実に生きる」、「不正をはたらかない」、「節度をもつ」といったことぐらいいしか語ることができないのである。だが、この程度のことならば、「学識などなくてもよいくらい」だともいえる。⁸⁾

だから、哲学部は要らない、という話しにもなってくる。もっとも、こうした判断は、カントによれば、「違法な争い (gesetzwidriger Streit)」ではあるのだが。⁹⁾

《文学部 (ドイツでは「哲学部」のこと)¹⁰⁾の学問は「虚学」である》との——文学部に属する者ですらなぜか信じきっている——臆説は、哲学的分析では、カントの示したように、「下級」の哲学部が、「理性」に基づかぬ「公衆が迷信的に認めている魔術的な力」を具えた「実学」たりえない、という理解からくるであろう。

ピンポイント検索の誤爆

ところで、ICTの進展により書籍そのほかのドキュメントも電子的に読まれるのが大衆化された今日の段階にあって、古典作品のOCR化による研究技法は、グローバルレベルで公開された膨大なドキュメント群を相手にして検索するマイクロレベルのものにまで深化してきている。このことにより、従来であれば汗牛充棟を相手に広漠たる文字群を渉獵するなかでようやく発見しえた知識のつながりも、瞬時にして拾い上げることが「可能」ともいえる状況になってきている。¹¹⁾これが、今日の文献主義の重大にし

て深刻な一局面である。

しかしながら、ピンポイントで検索できるこうした利便性に胡坐をかくと、とんでもない誤爆も惹き起こしかねない。

本のページを斜め読みにせよめくりあげる読書であれば、その過程で、探索すべき対象を位置づける文脈をも領略し、他の文献との参照通路も——課題意識に留まるやもしれぬが——開けるのみならず、横道に逸れた要らぬ知識までも得られ、まさしくそのプロセス全体がみずからの文献主義的教養を広く深く積むものとなりえた。もつとも、このような方法では、問題とすべきテキストに行き当たるまでには膨大な時間を要し、あるいははまったくの坊主になり終わることも多々あつて、問題解決なり成果の観点からすれば非効率の極みともいうべきものでしかなかつたであろう。もつとも、今日のような検索技術のないもつとは、こうした渉

猟は、そのように難ずる発想すらも浮かばないほどの当たり前のもので、人文主義的研究は、もともと、そのような膨大な「無駄」を肥やしとするぶ厚い知識の地盤のうえに立つて広い視野で議論を構築するものなのである。そのなかで得られたわずかばかりの新たな知見にしても、研究プロセスでつかまれることによりその舞台も背景もはつきりした雰囲気なかで、くつきりと浮かび上がるものであつた。そして、それはそれで、人文主義の再生産で

もあつたのである。

しかし、今日のピンポイント検索には、こうした雰囲気がつたく伴わない。だから、その雰囲気を読まずに行きあたつた言葉だけをつなげていくなら、驚くべきフレームアップを無自覚のまま行うことにもなりかねない。状況とともに事実をとらえず、出会い頭のを断片的にデフォルメして都合の良い議論を組み立てる。今日の人文主義がこうした迷い道に入り込んでいないかどうか、細心の検証が不可欠である。この意味で、検索で得られた結果をあくまで仮説としてとらえ、そこにまつわる雰囲気を明確にする作業を通じて検証するという「仮説・検証」型の研究方法に、人文主義も大きく推移しつつあることを自覚的にとらえ、しかもとくにその「検証」部分で本来的な人文主義を発揮してみせる必要があるのではないか。

「書の無い」時代に

全国大学生生活協同組合連合会によると、文系の学生で一日の読書時間がゼロである割合は、二〇一五年調査の段階で約四割に及ぶとされる⁽⁴⁾。そのうち文学部の学生の括りでどうなのかは、このかぎりでは不明だが、それと大きくかけ離れているわけではない

だろう。このさい、電子書籍も含めれば不読は減っているという想定もありうるところだろうが、前掲の調査では、電子書籍等の分別がないから、内数としてそれが含まれていると受け取るのが自然だと思われる。よしんば、電子書籍のみが省かれているとみても、文化庁の「平成二五年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」(二〇一四年)では、「電子書籍のみを利用して」者が二〇代で三・八%にとどまるから、読書時間がゼロである割合が三割五分を下回るほど激減するとは思われない。

つとに、レイ・ブラッドベリは、一九五三年刊の『華氏451度』において、「修学年限は短くなり、規律はゆるみ〔discipline relaxed〕、哲学、歴史、外国語〔languages〕は捨てられ〔dropped〕、英語や綴りの授業は徐々に遠ざけられ〔neglected〕、ついにはほとんど完全に無視されて〔ignored〕しまうだろう。時間には足りない、仕事は重要だ、帰り道ではいたるところに快楽が待っている。ボタンを押ししたり、スイッチを入れたり、ボルトやナットを締める以外にいったいなにを学ぶ必要がある？」と、昇火隊長 (fire captain) ベイティーに語らせる。¹⁶⁾

日本の現在では皮肉にも修学年限が長くなってはいるが——実質的内容からすればたんに間延びしているだけでやはり短くなっているも同然である——、「哲学、歴史、外国語は捨てられ」と

いう事態は、根深く進行している。だが、もしかしたら、これに對して、すくなくとも「外国語は重視されている」との表面的な反論はあるかもしれない。しかし、それは英語至上主義からするものでしかなく、第二外国語の廃棄は、今日の大学教育の趨勢であろう。¹⁷⁾ しかも、その英語教育も、日常会話程度の能力がもつとも重視され、米英の二流市民たることで嬉々とする自発的植民地化教育以上に出ない。そして、その手の米英二流市民を作るために、国語教育の時間は大幅に削減され、さらには国語力のない国民までも作ることに政府自身が狂奔している。¹⁸⁾

それに、スマホで画面をタッチしさえすれば、当座に必要な情報が瞬時に取れる(かのように思い込む——前節参照)。その情報の可否は、さしあたり問題ではない。必要にに応じているという直感がありさえすれば、それでOKである。ベイティーは言う。「不燃性のデータ〔noncombustible data〕をめいっばい詰めこんでやれ、もう満腹だと感じるまで、『事実』をぎっしり詰めこんでやれ。ただし国民が、自分はなんと輝かしい情報収集能力を持つていることか〔absolutely 'brilliant' with information〕、と感じるような事実を詰めこむんだ。そうしておけば、みんな、自分の頭で考えているような気になる。動かなくても動いているような感覚が得られる。それでみんなしあわせになれる。なぜかとい

うと、そういうたぐいの事実は変化しないからだ。哲学だの、社会学だの、物事を関連づけて考えるような、つかみどころのないものは与えてはならない。そんなものを齧ったら、待っているのは憂鬱〔melancholy〕だ。」⁽¹⁹⁾

我々は、いままさに、ブツラドベリの描いた人文主義の崩壊局面に生きているといってもけっして過言ではないのではないか。

人間のあり方の脈絡をつかみうるか

ヘーゲルは、「朝早くに新聞を読むことは、リアリズムからする朝の祈り (Morgensegen)⁽²⁰⁾のあり方である。」⁽²¹⁾という言葉を残した。

我々は、日々現実のなかで行為しているわけだから、現実を知らないことには始まらない。だから、それを知ることが、身勝手な——「今日も幸せでありますように」といった——願いを神に命ずる以上に、必要不可欠なことである。

しかし、このことは、「神」にまつわるいわゆる「神学論争」なるものの無意味さを回避せんとする政治的なニヒリズムではなく、すぐれて学問的に誠実なことである。ましてや、報道する者の意図を度外視して伝えられた言葉をそのまま丸のみにしようと

する受動主義的な一知半解、あるいはその報道を曲解して勝手読みを貫徹するセクシヨナリズムによるものではない。その「祈り」は、「神」に捧げられるものである以上は、紙背に徹して「真実の善」をつかみ取ろうとする沈黙考である。それに、大学という場は、そもそもそうした「神学論争」をする場なのであって、多数決で真理なるものを決する場なのではない。

だが、そうした思索は、たんに字面を追うだけのことで、おそらく、おおよそなすべくもない。むしろ、それに踊らされ、報道されたとおりに動くことこそが、みずからの生を幸せに全うするものだと信じて疑わないだろう。それこそは、わが生にとり建設的であり、責任あるありかただとみなされるからである。

なにが根本的に違うのか。それは、直接的に示されたもの、がもつ脈絡をにわかに想起できる精神がある、かいかである。そうした脈絡は、つねに過去の因縁にまつわり、その因縁は、その生きた現在の人の心によって結ばれている。そうした因縁を迷信とみなすか、いまなお生きた現実とみなすかは、この場では論じない。ここでは、現に示されたものを意味あるものとして示すには、それに関係する歴史的地理的脈絡と、そこに生きた人間の思想が深く関係していることに気づきさえすれば、字面を追うだけの浅薄さを脱する糸口ができることぐらいを指摘しておこう。

因縁なんかを持ち出せば、にわかには御神籤や占い師に頼つておのれの生き方を決めようとする向きも出てくるであろうが、人文主義の精神は、こうした安直さや他人まかせを断固拒否するところに成り立つといわねばならない。(ついでに、御神籤・占いを弁護しておけば、それを学問的に妥当とするつもりであれば、みずからその学知を身につけ修行するのであって、他の託宣なるものを信ずるわけではない。)

絶対的とされる国家権力といえども左右できぬものは、人の生き死にである。森鷗外は、そのように身を処した。その遺書において、墓碑銘に一切の官位を記すことを断じて拒否したのである。

しかし、そうした考え方を貫徹するには、おのれの生き死にを他人まかせにしない強靱さが不可欠である。なんの位置づけもなくおのれ一人であつても、おのれそのものがそれとして意味ある存在である。

では、こうした強靱さは、いったいどこからくるのか。

鷗外論はともかく、これは、みずからの内面に潜む絶対的に神なものをつかみ取る以外には、ありえないと思われる。御神籤にせよ占いにせよ、みずから信ずる絶対的なものは、つねに外在的なものでしかない。ここから翻れば、みずからの内面に動かしたい「真実の善」があるのであれば、それは、香具師の世界

にほだされない生き方を選び取ることができるとであろう。

ただ、こうした内面は、無内容な〈点〉でしかないのであつては、消え去るのみだろう。それは強靱のように見えて、突けば消えてしまうシャボン玉でしかない。

だとすれば、内面の内容充実を図り、それを強靱なものにしていかなければならない。そして、その通路は、精神の現存在である〈話し〉以外には、ありえない。

人文主義は、個々人の内面を「真実の善」で充実させ強靱なものとする、それこそヒューマニズムそのものなのである。

ルネサンスが古典主義であつたわけ

これは、いわば同語反復であろうが、西洋のルネサンスの歴史に無知な私は、ここでその根本動機を学問的に語る資格は持たない。ただ、(いま現在に知り、えていないことがすでに過去に十分考え抜かれていた)ことへの驚きこそは、ルネサンスの動因になつたに違いないと確信する。

オルダス・ハクスリーの『すばらしい新世界』において、「ときには何百何千つて楽器が耳もとでブーンとひびくことがある、かと思うと、歌声が聞こえてきて」という『テンペスト』の章句

を口ずさむ西ヨーロッパ駐在世界統制官ムスタファ・モンドは、シエークスピアが禁書である理由をこう語る。「古いからだよ。それがおもな理由だ。ここでは古いものを必要としていない」。これに対して、野蛮人ジョンは喰い下がる。「美しいものであってもですか」。モンドは言う。「美しいものはとりわけ必要がない。美は人を惹きつける。われわれはみんなが古いものに惹きつけられるのを望まない。新しいものを好きになつてほしい」。ジョンは抵抗する。「でも、新しいものは愚劣で嫌なもの〔stupid and horrible〕ばかりです。あの映画だつて、ヘリコプターが飛びまわつて、他人がキスしている感触を感じとるだけの話だ」。そして、ジョンは、「さかりのついた猿め！」〔Goats and monkeys〕と叫ぶ。「軽蔑と憎悪を充分に表現できるのはオセローの言葉しかなかった」のである。⁽³³⁾

過去や世界に通路を持たない知、それがいかに薄べらいものであるかは、精神の多様性とその広さと深みの一端をそれとしてわずかばかりでも知りえている者にとつては、語るまでもない自明のことである。われわれが現在を生きているというのは、つねに、過去と未来とを共に生きているからである。現状のふがいない成績を悔い、明日への努力を誓うというのも、それがよしんば一時の申し訳程度の言い逃れでしかないとしても、それが人の生きる基

本的な在り方だからではないのか？

私の知りえていない知、それがすでに存在し、それに触れることでこそ現実の脈絡が見えてくる。これこそが、古典への接触であり、それを現在に生かす道である。人文主義は、その方法を提供するものであり、人文学は、それを実践する学問の場である。

ただ、その古典への接触は、当然ながらそれ相応の学識獲得を経なければものになりえない。そして、また、その接触こそが学識自体を次世代に継承していく使命も持ちあわせている。とはいえ、だからといって、自動的に現在への通路も明確になるとはかぎらないだろう。そうなると、ハクスリーのモンドが言うように、「古いから」要らない、という評価にもつながりかねないのかもしれない。ここが、考えどころである。

人文主義を忌避する欲望

今日の世界をエネルギーとして動かすたとえば電気に関する学知は、すでに古典になつたので研究する価値がなくなつた、と豪語する学者がいるのであれば、ぜひ、名乗り出ていただきたい。その方々は、そうした科学研究への資金を打ち切つて、さらに学問それ自体としても陳腐化したのでそれを廃絶すべきだ、と堂々

と主張すべきではないか。

しかし、そのようなことは、けつして起こらないだろう。それは、なにも、みずからの利害関係からするわけではあるまい。いや、むしろ、そのような古めかしい基礎科学の分野の研究こそ新しいなにかがありうるという予感が本当はあるからである。

ところが、どっこい、人文学に対しては、それと同情の発想が生まれてこない。なぜか。

それは、おそらく、人文主義が科学技術に対してすぐれて人間主義的な審級を持ちあわせていることを、他の学問分野がうすうす気がついているからである。

たとえば、いわゆる研究倫理は、本質的に人文主義的な問題構成から成り立つ。脳死問題は、その判定基準をいかに技術的に精緻に拵えようと、最終的には人文主義的にしか決着しえない。遺伝子組み換えによる生命創造の是非も、人文主義的にしか判断できるはずがない。

その理由は、きわめて単純である。物事の是非判断、正邪判断、善悪判断は、「事実」なるものを事とする技術判断とは相容れない——人間にしかありえない——高次な理性水準の「権利判断」の領域であるからだ。もちろん、だからこそ、「識者」なるものの言を都合よく利用してジャーナリズムが社是に従って事柄をめ

ぐる世論を誘導することもしてみせるわけだが、だからといってその世論結果も、事柄を決する根拠とするには妥当とはいえない愚かしさを免れない。いまでもアメリカ世論は、原爆投下が日本を敗戦させるために必要だった、と信じて疑わない。しかし、原爆投下が戦争犯罪として人間的悪の超絶の最高級だとする権利判断が揺らぐことはけつしてありえない。

人文学の基礎研究を廃絶してその息の根を止めようとする反人文主義者の秘かな試みは、みずからが事とする科学技術の人間学的是非・正邪・善悪に「他から——とりわけヒューマニズムから——」判断してもらいたくないからである。いや、そうした是非・正邪・善悪を等閑視して、「さかりのついた猿」であり続けたい一心からである。

だから、基礎研究は必要でも、人文学は不要である、と、喧伝し続ける。国民の「永遠の幸せ」や「市民的な幸せ」、「身体的な幸せ」のためには、人間に「憂鬱」や苦悩をもたらす人文主義など不要なのである。

文学部は学識の左翼として抵抗する

時の政府がどのような政策をもって国民に「幸せ」をもたらそ

うとも、その政策のよって立つ教説が是非・正邪・善悪のいかなる判断をも免れることはありえない。それから免れようと公然と主張する政府がもしあるとするなら、その政府は、いかなる理性的なものをももたえない事実的に教義的・宗派的・党派的独裁裁でしかありえないだろう。

カントは、「上級諸学部」がなす「教説」の「真偽」は、あくまで「理性」に服さなければならぬと断固として主張した。しかし、その「理性の関心を配慮するべきは哲学部」なのである。しかも、その政策的教義なるものは、国家の権力と権威を笠に着ても、「理性が必然的なものとして主張する教説と常におのずから合致するとはかぎらない」から、「上級学部と下級学部〔哲学部＝文学部〕との「争い」は避けられないし、しかもそれは「合法 (gesetzmäßig)」なのだという。なぜ「合法」なのか？ それは、「公に述べられ原則として立てられるものすべてが真であるように留意することが、下級学部の権能であるばかりでなく義務でもあるからである」⁽²⁴⁾。

ただ、このような主張に対しては、三権分立というモンテスキューの要請に従うなら、司法権力がその真偽判断をすれば事足りるとする向きもあるのではないか。もちろん、「争い」にいますぐにでも決着をつけるつもりなら、そうならざるをえないだろ

うし、カントも一応はそれを容認しているかのようにもみうけられる。しかし、カントは、慎重に言葉を選ぶ。「理性という」裁判官による法的効力を持った宣告」として、「理性」と実際の自然たる「裁判官」とのずれの可能性を認め、しかも、「理性」そのものの優位性を断固として主張しているのである。

そして、「哲学部は、真理の保護を託されている以上、真理を脅かす危険に対する武装を決して解くことができない」と宣言する⁽²⁵⁾。もつとも、カントが議論しているのは、あくまで学部間の「争い」であり、政府の政策そのものではない。しかし、政策のよって立つゆえんが「上級学部」の論調にある以上、「上級学部という等級は（学識という議会の右翼として）政府の諸規約を弁護するが、他方、真理が問題である場合には当然必要とされるくらいに自由な体制においては、反対党派（左翼）もなければならぬのであって、これが哲学部の占める議席なのである」⁽²⁶⁾。

いまや世には多数決しか民主主義ではないという俗説的な確信がまかり通っている。多数派が形成されさえすれば、説明も討論もそつちのけで強行採決し、おのが理性能力のなさを露呈させて恥じない。これはなにも本邦の議會の実態だけというよりも、嘆かわしいことに学問の府である大学の教授会ですら横行しているのではないか。学長専断体制に対して保身専一とし、みずからの

専門領域にヤドカリのごとく身を潜めることによって…。

こうした現状のなかにあって、あらためて、カントの《哲学部
Ⅱ左翼》論に耳を傾けたい。「反対党派が厳密な吟味を行って異
論を唱えなければ、政府は自分自身にとって有益であったり不利
益であったりすることについて十分な教示が受けられない。」¹⁾こ
の主張は、愚かしくも道を誤らせる政策の強行突破的な遂行を防
遏せんとする『葉隠』的、死に狂いの、佐幕的、主張である。これにた
いし、ヘーゲルならば、学問の世界は、絶対精神の領域にあるも
のとして、現実の国家をも超越して自由を觀望することにならう
か。だが、これとて、時の権力の嫌疑を辞さない考察である。

だとすれば、「曲学阿世」とは、国葬をもって敬せられるがこ
ととき「偉大な」実際の政治家がひとりの誠実な理論的政治学者に
投げつけてもいような悪罵などではなく、政府に対し影響力を
十分に行使できるはずの「上級学部」に身を置いてすら、学者の
本性としてはかならずや持ち続けなければならないはずの「哲学
部的な反対党派」たるべき生き方を忘れ、政府にすり寄りその軍
門に下った醜い姿を揶揄するという、正しい意味で正確に使用し
なければならない。もちろん、かの理論的政治学者がその名に値
しないことは、世の知るところである。

人文主義は、権力や権威に笠を着る似非知性に対して、個々の

研究領域は細分化しつつも、全体としては左翼反対派の理性的吟
味を本領として、「真実の善」を考究すべく将来にわたり人間の
実相に迫る学問として生き続けることにならう。

註

- 1 神経がなす電気信号を感知して義手等に伝達し意図どおりに動かす技術の進
展には目覚ましいものがあるが、それでも、その種の技術は、インブットと
アウトブットの総体をなす「精神」にはたどりつけない。
- 2 Vgl. G. W. F. Hegel Werke, Bd. 12, Suhrkamp, Frankfurt am Main 1970, S. 53.
- 3 Cf. Millulducar: *A Thousand Pleasant Things. Selected from Notes and
Queries*. New York 1857 (Google), p. 89.
- 4 Immanuel Kant, „Der Streit der Facultäten in drei Abschnitten“, S. 18 f. in:
Kants Werke. Akademie textausgabe, Bd. 7, S. 18 f. カント「諸学部の争い」
——三部からなる「角忍」・竹山重光訳『カント全集』第一八巻、岩波書店、
二〇〇二年、二六頁参照。以下、訳文は、これによる。
- 5 A. a. O., S. 21. 前掲邦訳、三〇頁。
- 6 A. a. O., S. 23. 前掲邦訳、三二頁。
- 7 「実務家」は、「政府の道具（聖職者、司法官、医者）」として公衆に対して法
的な影響力を持つており、学士という特殊な階級を形成するが、学識をみず
からの知恵に基づいて自由に公に用いることはできず、学部による検閲のも
とでのみ公に用いることができる。」A. a. O., S. 18. 前掲訳書、二五頁。なお、
神学、法学、医学のそれぞれの学識の差異および哲学との関係を詳細に論ず
るのがカントの論脈であり、前三者を一括して——面的にして——済ます
のは、本稿の主題の限界による。また、本日の学術の分化の現状からすれば、
とりわけ理工学部への言及も必要とならうが、本論の趣旨としてそれをあえ

- て加えて議論するまでもないと判断した。本論としては、理学部は哲学部、工学部は医学部と同類である。
- 8 A. a. O. S. 30. 前掲訳書、四一頁。
- 9 A. a. O. S. 31. 前掲訳書、四三頁。
- 10 カントは、「哲学部に含まれるのは二つの部門」だとして、「歴史的認識 (historische Erkenntnis) 部門 (自然科学が経験的認識として提供するすべてのものを含め、歴史 (Geschichte)、地理、学問的語学知識、人文学 (Humanistik) がこれに属する)」と「純粹な理性認識 (純粹数学と、純粹哲学すなわち自然および道徳の形而上学) の部門」とを挙げる。A. a. O. S. 28. 前掲訳書、三八頁以下。
- 11 『大辞苑』第六版(二〇〇八年)にはじめて見出し語として採録された「虚学」とは、それによると、「実学に対して、実社会で直接には役に立たない学問」の謂いとのこと。こうした『大辞苑』執筆者の学問観は、問われるべきである。『大辞林』第三版(二〇〇六年)、『大辞泉』第二版(二〇一二年)では、見出し語として採用なし。けれど、見識であらう。
- 12 A. a. O. S. 31. 前掲訳書、四二頁。なお、たとえば、テレビという機器には学問的な見識とそれに基づく技術が集積されていることは言うまでもないが、一般の国民にとってその学問や技術は知るまでもないことであり、それゆえテレビは、一般の国民にとって魔法である。夢の原子力利用もしかり。癌の治療法もしかり。
- 13 もっとも、OCRの精度依存のところがあり、本来は、その変換が正確であるか、人間の目による綿密な校正を経なければ、信頼性が欠ける。たんに機械的に処理しただけのテキストでは、てならぬ変換により、ヒットすべきものもしないのがいまだに今日の水準である。
- 14 全国大学生生活協同組合連合会「第五一回大学生生活実態調査の概要報告」による。http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html(二〇一七年二月五日現在)
- 15 Cf. http://www.bunkago.jp/lokei_hakusho_shuppan/lokeichosa/kokugo_yorinchosa/pdf/425_chosa_kekappdf(二〇一七年二月五日現在)
- 16 レイ・ブラッドベリ『華氏451度』(新訳版)伊藤典夫訳、早川書房、二〇一四年、九四頁。Cf. Ray Bradbury, *Fahrenheit 451*, 59 ed., New York 1983, p. 59. 引用は伊藤訳により、必要に応じて原語を補足した。
- 17 「変わりゆく第二外国語」『朝日新聞』二〇〇八年五月二六日朝刊(聞蔵)参照。泉水浩隆「日本(の)大学における第二外国語教育をめぐる現状と課題——スペイン語教育を中心に——」『学苑』(昭和女子大学)八二一号、二〇〇九年、四三―五二頁参照。
- 18 永井忠孝『英語の害毒』新潮新書、二〇一五年参照。
- 19 ブラッドベリ、前掲訳書、一〇三頁。Cf. Bradbury, *op. cit.*, p. 65.
- 20 “MORGENSGESEN, m. segen, gebet zur morgenzeit nach dem aufwachen gesprochen, um sich oder andere dem schutze gottes zu empfehlen”. Vgl. *GRMm*, Bd. 12, Sp. 2580.
- 21 Georg Wilhelm Friedrich Hegel, “Aus dem Jenaer notizenbuch”, Nr. 32. *Gesammelte Werke*, Bd. 5, Hrsg. Deutsche Forschungsgemeinschaft, Rheinisch-Westfälische Akademie der Wissenschaften, F. Meiner, 1998, S. 493.
- 22 このさい、国家権力による死刑の是非を論ずることは、本論の課題ではない。
- 23 オルダス・ハクスリー『すばらしい新世界』黒原敏行訳、光文社古典新訳文庫、二〇一三年、三二―五頁以下。Cf. Aldous Huxley, *Brave New World*, 1932 (published in 1977 by Triad/Panther), p. 176.
- 24 Vgl. Kant, a. a. O. S. 32. 前掲訳書、四四頁以下。
- 25 A. a. O. S. 33. 前掲訳書、四五頁以下。
- 26 A. a. O. S. 35. 前掲訳書、四七頁。
- 27 A. a. O. 前掲箇所。